

News Letter

演劇の総合的研究と演劇学の確立

The 21st Century Centre of Excellence Programme, Waseda University
Development of Research and Study Methodologies in Theatre

報告 モンゴル演劇・映画講座	1
特集記事	
日英近松劇上演プロジェクト	2
2006年度博士論文成果報告会	
◆古典演劇研究コース	3
◆アーカイブ構築研究(映像)コース/芸術文化環境研究コース	4
◆演劇理論研究(舞踊)コース/ アーカイブ構築研究(演劇)コース	5
◆演劇理論研究(西洋/比較)コース/演劇理論研究(東洋)コース	6
イベントカレンダー	7
新刊紹介/特別研究生募集/ 編集後記/事務局移転のお知らせ	8

報告 モンゴル演劇・映画講座

6月20日、21日の両日、大モンゴル建国800周年・日本におけるモンゴル年を記念し、早稲田大学演劇博物館21世紀COEプログラム、早稲田大学モンゴル研究所、社団法人日本モンゴル協会の主催による、モンゴル演劇・映画講座「モンゴル演劇・映画の今——歴史と未来を見据えながら——」が、早稲田大学国際会議場井深大記念ホールにて開催された。モンゴル国の著名俳優陣を招いての大規模な講座はこれまでモンゴル国内でも世界でも行われた例がなく、日本・モンゴル両国の演劇博物館による最初の共同事業ともいえる記念すべき講座となった。

初日の第一部「モンゴル演劇講座」では、まず、モンゴル国立演劇博物館D.ツェドマー館長が「モンゴル国立演劇博物館の活動」について、教育・研究機関としての活動状況を紹介、続いて、人民俳優のP.ツェレンダグワ、D.メンドバヤル夫妻が「モンゴル演劇における男と女の演じ方——翻訳作品から」というテーマで代表的出演作品を紹介しながらこれまでの俳優人生について語り、それぞれが主演作の独白場面を演じた後、夫妻で「リチャード三世」の一場面を熱演、迫真の演技に会場より拍手が沸き起こった。続いて、チョイノム名称ひとり劇団「オドテアトル」主宰の功勳俳優D.ソソルバラム氏が「人と芸術——芸術と人」というテーマで俳優としての哲学を語った。また、現在、主演中の舞台「握り締めた血塊」より「チンギス・ハーンのモノローグ」の一場面を演じ、歌を披露、会場は大いに盛り上がった。続く講演では、劇団「エルヘム・エルチ」主宰の人気俳優S.ハグワスレン氏が「モンゴルのコメディ—シアター」の現状について紹介、自身のレパートリーの中から、女装してのパフォーマンスを披露、会場が笑いと喝采に包まれた。初日最後のパネルディスカッション「モンゴル相撲と演劇」では、パネリストに大関白鵬関を迎え、岡田和行(東京外国語大学教授)、吉田順一(モンゴル研究所所長)、竹本幹夫



大関白鵬関参加によるパネルディスカッションの様相

(演劇博物館館長)の各氏が、日本とモンゴルにおける相撲と芸能との関わりについて、白熱した議論を展開した。

二日目のパネルディスカッション「モンゴルにおける翻訳劇」では、秋葉裕一(演劇博物館副館長)と冬木ひろみ(早稲田大学助教授)の両氏が、それぞれプレヒト、シェイクスピアの専門家の立場からパネリストとして参加、モンゴルにおける翻訳劇の歴史について、モンゴル人俳優らの体験談を中心に興味深い議論を展開、両国における西欧翻訳劇を語ることによって、東アジア諸国の文化の共通性を認識し合えることを再発見する機会となった。第二部「モンゴル映画講座」では、モンゴル映画撮影所所長兼モンゴル映画芸術大学学長のJ.ソロンゴ氏が「モンゴル映画の歩み」について講演、続いて、モンゴル映画史における最初の作品『モンゴルの子』が上映された。その後、「ZAYA-SH」主宰の若手映画監督Sh.ダワードルジ氏が「民主化後のモンゴル映画——若者たちが創り出すモンゴル文化」というテーマで自らの活動を例にモンゴルにおける映画制作現場の実情について講演、同氏が制作したM-POPのプロモーションビデオも紹介された。最後に、パネルディスカッション「モンゴル映画と私」では、パネリストに朝赤龍関を迎え、二木博史氏(東京外国語大学教授)、吉田順一氏、モンゴル人俳優・映画監督らが参加、それぞれが記憶に残る作品について熱く語った後、モンゴル映画の現状と今後の課題について問題を提起しつつ、2日間にわたる講座が終了した。(客員研究助手 木村理子)

日英近松劇上演プロジェクト 湯浅版『堀川波鼓』

2006年4月4日(火) 19:00、5日(水) 14:00

小野記念講堂

4月4日および5日、本拠点ではイギリス国立ハル大学と共同主催する形で、ハル大学近松シアターカンパニーによる「堀川波鼓」(Tsunami-drumbeats over the Horikawa)を小野記念講堂で上演した(英語上演)。同公演は、イギリス国立ハル大学(演劇音楽学部)、大阪市立大学(文学研究科21世紀COEプログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」)、そして早稲田大学(演劇博物館21世紀COEプログラム)の3大学を中心とする「日英近松劇上演プロジェクト」の一環として行われ、3月から4月にかけて、ハル大学および英国内ツアーのほか、大阪(精華小劇場)および東京(早稲田大学)で上演された。

今回の公演のプロデューサーであり、翻訳・演出も務めた湯浅雅子氏(ハル大学名誉研究員)は、近松門左衛門の作品を世界に広めていこうと、2004年に「近松プロジェクト」を立ち上げ、英訳・現地キャストによる『女殺油地獄』を英国内で上演している。今回はその第2回として、ハル大学演劇学科の学生キャスト9名とともに近松の世話物の代表作である『堀川波鼓』を上演し、近松の世界を英語圏の人々に紹介するとともに、さらに日本へ「逆輸入」することで、作品にこめられたテーマや芝居を構成する様々な要素を深く浮き彫りにしようとした試みであったといえよう。

二日目の公演後には、竹本幹夫・COE拠点リーダーを司会とし、湯浅雅子氏ならびにティム・キーナン氏(ハル大学演劇学科講師)および全キャストと共に観客を交えアフタートークを実施した。作品の持つテーマとイギリス人俳優によるその受け止め方、文化や時代が違う環境で上演する際の課題、所作や衣装・道具、レパートリーとすることの困難性や英訳における固有名詞の扱いなど、多くの質疑が展開された。



上演の様子



アフタートーク

ハル大学の演劇学科は、60年代に設立以来、翻訳劇や翻案劇に関心を持って活動を展開してきており、戯曲の翻訳に限らず上演に関わる様々な要素の研究を進める翻訳公演作劇術センター(Centre for Performance Translation and Dramaturgy)も設置している。演劇が実際に上演されていく過程で生まれ認識されていく課題や知見を追究する場を国際共同事業として持てたことは本拠点にとっても貴重な経験であったと思われる。(客員講師 宮崎刀史紀)

博士論文成果報告会

2006年7月1日(土) 15:00~18:00 14号館514教室

① 深谷大 【古典演劇研究(人形浄瑠璃文楽)コース・特別研究生】

2006年度早稲田大学文学研究科 芸術学(演劇映像)専攻 学位論文
「草創期の浄瑠璃とその享受—岩佐又兵衛風絵巻群の周辺—」



深谷大氏



山本真司氏

② 山本真司(天理大学専任講師)【演劇理論研究(西洋/比較)コース・研究協力者】

2005年度ロンドン大学 Ph.D取得論文

“Banqueting as a Cultural and Social Practice in Shakespearean Drama”

浄瑠璃研究およびシェイクスピア研究で学位を取得されたお二人にお願いし、今年度第1回の博士論文成果報告会を行った。両氏とも研究対象や調査方法が非常にユニークで精緻であり、幅広い分野から集まった参加者との間で、分野を越えた活発な議論が展開された。

(客員講師 宮崎刀史紀)

古典演劇研究コース 活 動 報 告

「COE公開講座 義太夫節の長時間レコード—古靱太夫(山城少掾)・清六の「熊谷陣屋」「沼津」「鎌倉三代記」を聴く—」
(講演:立命館大学客員研究員 大西秀紀氏)

2006年3月18日(土) 10:30~18:30 6号館318教室

今回、古典演劇研究(浄瑠璃)コースでは「浄瑠璃の復元的研究」の一環として、従来、特殊な装置がなければ再生困難であった音源資料“長時間レコード”に含まれていた二代豊竹古靱太夫(山城少掾)、四代鶴澤清六による奏演の復元を試み、その成果報告を兼ねた試聴会を開催した。

午前10時半「熊谷陣屋の段」に始まった試聴会は、昼食をはさんで「沼津の段」、復元作業を担当した大西秀紀氏による長時間レコードの解説、デジタル技術を用いた復元作業についての報告の後、午後5時から「鎌倉三代記・三浦恩愛の段」を聴くという長時間に及ぶものとなったが、最後に行なわれた参加者による意見交換には熱気が溢れ、貴重な経験をした充実感が窺われた。約八十年ぶりに蘇ったこれらの音源資料は、CD化され、八月末に紀伊国屋書店より発売される予定である。

神津武男氏(COE客員講師)「浄瑠璃本基礎知識講座(一) 古浄瑠璃の諸本」

2006年5月29日(月) 17:00~18:30 6号館318教室

(アーカイブ構築研究(演劇)コース・古典演劇研究(浄瑠璃)コース共催)

第一回目は古浄瑠璃諸本の話を中心に、絵巻から絵入本への流れ、古活字本や版本の制作方法、浄瑠璃本の書誌についての解説など、資料としての浄瑠璃本に関する基礎的な講義が行なわれた。実物の版本や本を使った具体的な解説、参加者との質疑応答を交えて進められる講義は、専門的に充実した内容でありながら、初心者にも理解しやすいものであった。第二回以降は、現行の文楽、歌舞伎へ繋がる「義太夫節」の浄瑠璃本講座を予定している。(特別研究生 小島智章)

共催企画報告①

「狂言とことば」(能楽学会共催)

2006年3月20日(月) 14:00~17:00 小野記念講堂

能楽コースと能楽学会とによる共催イベントは2005年3月の「平家と能」演奏会に引き続き二回目となる。今回は狂言をことばとの関係から多角的に追求し、大蔵・和泉両流の最古台本を用いて狂言(川原太郎)の実演公演を行い、中世口語を復元し、口語面からのアプローチを試みた。

まず小林千草氏の監修により大蔵虎明本を用いて室町時代の口語の特徴的音韻を復元し、大蔵流狂言師山本則重・則重両師に実演をお願いした。お二人は普段の舞台活動や生活では使用しない音韻を見事に習得し、披露してくれた。続いて坂本清恵氏の監修により天理本(川原太郎)を用いて室町口語の音韻・アクセントを復元した。研究者三名による実演にはCOE特別研究生の佐藤和道氏も参加した。古典演劇の復元方法の多様性を示す大変意義深いものであった。

共催企画報告②

奏演とシンポジウム「舞う—舞楽と能—」(楽劇学会共催)

2006年6月3日(土) 13:30~17:00 小野記念講堂

本企画は舞楽と能における舞と装束付けの比較という歌舞伎・日本舞踊コースと楽劇学会共催ならではの企画である。講師には各分野の第一人者が集結したことで多くの観衆が集まり、盛況なシンポジウムとなった。

舞楽は伶楽舎音楽監督の芝祐靖氏と元宮内庁式部職楽部長の山田清彦氏が左舞・右舞の比較を袴姿で披露、所作の基本を解説する。能楽はシテ方金春流櫻間金記師が型の基本を紹介する。後半は舞台上で装束付けを披露し、解説を交えながらそれぞれの出立が完成するまでの過程を見せた。

終了予定時刻を大幅に超過したが、複数の分野の第一人者の舞を同時に見ることができ、その上普段見られない装束付けを舞台上で披露する貴重な機会に、観客の熱気は最後まで冷めないままであった。(客員研究助手 江口文恵)



装束付け披露より。左：舞楽(山田清彦氏)。右：能(モデル：シテ方金春流井上貴覚師)

アーカイブ構築研究(映像)コース **活 動 報 告**

2006年3月1日より10日まで、アーカイブ構築研究(映像)のコースリーダー小松弘、同COE助手志村三代子、および通訳として参加して下さった文学学術院教授員澤哉先生(事業推進担当者)の三人は、舞踊コースの川島京子氏、鈴木晶先生および芸術文化環境研究コースの宮崎刀史紀氏と合同でロシアでの研究調査を行なった。今回はわれわれ映像と舞踊のチームが昨年来続けている、バレエ映画研究を一つのテーマとして、モスクワの国立映画アーカイブ、ゴスフィリモフォンドにおいて、帝政ロシア時代に製作されたバレエに関連すると思われる映画の試写をしていただいた。これらの作品のうち、1913年製作のヤーコヴ・プロタザーノフ監督「音楽的瞬間」はごく短い断片のみが残されているに過ぎないが、エカテリーナ・ゲルツァーとワシーリ・ティホミロフのパ・ドウ・ドウが記録されており、映画史的にはもちろん、バレエ史的な観点からも非常に貴重な映像である。ゲルツァーは1901年にポリショイ劇場のエトワールになって以来ほぼ半世紀もの間この劇場で踊り続けた伝説的なバレリーナである。1913年には「 Coppélia」の全幕を彼女のスワニルダ役で映画撮影したようだ。「音楽的瞬間」はシューベルトの音楽の伴奏に合わせて踊った作品であったようである。相手役のワシーリ・ティホミロフは実生活でゲルツァーの夫であったダンサーである。

今回、川島氏が研究の対象としているエレナ・パヴロワの名前を小松が現存する帝政ロシア映画のカタログの中に見つけたので、この作品「生ける屍」も試写に加えてもらった。残念ながら映画に登場したのは同名の別人であった。しかしこのトルストイの劇に基づいた映画(1911年製作)は様々な意味で興味深い作品であった。エル・ペルスキという小さな会社で作られたこの映画は、当時の批評によると撮影が極めて悪く、画面はぼんやりとしており、照明も貧弱であると批判されている。実際現在残っているこの映画の僅かな部分を見ても、同時代の他の帝政ロシア映画—とりわけハンジョンコフやドラニコフといった大会社の作品—と比べて撮影面で見劣りする。しかし演出面では、とりわけ俳優の演技のスタイル面でなかなか魅力的であり、私たちはこの映画の監督の名前を覚えておいた。このボリス・チャイコフスキーという監督は、これまでほとんど注目されてこなかった人であるが、1916年に彼が監督した「バレリーナのロマンス」という作品をこれの後試写していただき、その見事なまでのマニエリスムの演出に私たちは魅了された。

ゴスフィリモフォンドをお願いして、これらの映画はビデオ・カセットに収録してもらった。学生および研究者のために、これらの作品はいつでも演劇博物館のビデオ・ブースで見られるようにするつもりである。

(事業推進担当者 小松弘)

芸術文化環境研究コース **活 動 報 告**

「遊びに学ぶまち、ドイツ・日本子どもの参画交流会」

ドイツにおける子どもの遊び環境の専門家が6人来日した。この機会を利用して「2005—2006日本におけるドイツ年」の行事として、日独の子どもの芸術環境教育を含めた遊びと遊びの関係、子どもの社会参画に関して交流会を6月10日(土)、11日(日)に開催した。



初日は、子どもの遊び活動を実践している「新宿戸山プレーパーク」「台東区児童館」「佐倉子どものまち」の現場を2人ずつのドイツの専門家が訪ね、地元の市民やNPO、職員との意見交換を行った。写真は、戸山プレーパークにおけるドイツ人との交流会の様子で、右からハイデローゼ・ブルックナー博士(ドイツ児童基金連邦マネージャー)、通訳、ハルトムート・ウェーデキント博士(フンボルト大学教授)、筆者である。議論は、いかに子どもが主体的に学校教育や遊び場づくりに参画できるか、という点であった。

二日目は、ヴォルフガング・ザハリアス氏(ドイツを代表する子どもの遊び都市ミニ・ミュンヘンの創設者、メルゼブルク大学特任教授)、カーラ・L・ザハリアス氏(同創設者、ドイツIPA前代表)、ハンス・マイヤー・ホッファー氏(元ミュンヘン市青少年事業部長)、ヴァルドラウド・マイヤー・ホッファー氏(セルフヘルプ組織コーディネーター)の4人を加えて、子どもがつくる遊び都市に関する基調講演、パネルトーク、さらに子どもに優しいまち、子どもの参画等に関する4つの分科会を市川市で行い、高校生や大学生を含めて総数250人の参加を得て、活発な交流が展開された。

(事業推進担当者 卯月盛夫)

演劇理論研究(舞踊)コース 活 動 報 告

「コンテンポラリー・ダンスの振付法における現状と課題ワークショップ&シンポジウム」シリーズ最終回

『ダンス からだ エトランジェーコンテンポラリーダンスにおけるクリエイションを探る—対談:田中浜×松岡正剛』

舞踊コースでは2005年度一年間を通して、「コンテンポラリー・ダンスの振付法における現状と課題ワークショップ&シンポジウム」シリーズを開催してきた。これは、様々な国から最先端で活躍しているダンサー、振付家、ダンス教員を招聘し、彼らの振付法を学びながら舞踊の現状と課題を研究するという趣旨である。

最終回の第4回目は、日本の舞踊に目を向け、『ダンス からだ エトランジェーコンテンポラリーダンスにおけるクリエイションを探る—対談:田中浜×松岡正剛』を、2月8日小野講堂にて開催した。招聘講師は、世界各地を訪れ、エトランジェとして自己を相対化しながら踊り続け、同時に世界各国からのダンサー(エトランジェたち)を受け入れて共同作業を続けている舞踊家の田中浜氏と、日本伝統文化の研究者であり、田中氏とのコラボレーションも多い松岡正剛氏。総司会は、田中氏と40年に及ぶ交流がある舞踊コース事業推進担当の片岡康子教授が務めた。参加申込者が殺到したため、急遽会場を変更しての開催となった。



振付において、舞踊家は自らと他者のアイデンティティをどのように意識し、クリエイションを行っているのか？当日はこの問題に主な焦点を当て、三部構成で行われた。第一部は田中浜氏による基調講演。第二部は、シンポジウムメインとなる田中氏、松岡氏の対談。第三部では、COE舞踊研究コースの教員である尼ヶ崎彬教授、古井戸秀夫教授がディスカッサントとして加わった。基調講演では、氏が自らの70年代からの貴重な映像を交えながら、「踊りを知りたい、考えたい」という欲求の下に歩んできた過程を振り返った。時代ごとの自己のテーマと、作品へのその現れを自ら解き明かそうとする語りに会場は聞き入った。また、シンポジウムでは、田中氏が「僕の中にうねっているものにえさを与えられる」という、松岡氏ならではのあらゆる角度からの問いかけに、田中氏を動かしている「整理したくないマグマのような」秘密が徐々に引き出されていった。30年来の盟友でありながらも両氏がこのような公開の場で議論するのは初めて。舞台上の議論もさることながら、この日のために全国各地から駆けつけた客席の参加者からも次々と問題提起がなされ、大いに盛り上がった一夜となった。

(客員研究助手 川島京子)

アーカイブ構築研究(演劇)コース 活 動 報 告

「近代演劇上演記録データベース」について

ちらし、ポスター、プログラム、パンフレット等々、上演資料の多くは紙資料であり、材質的に経年劣化という問題を抱えている。特に昭和戦中期の紙資料は、戦災の他に資源統制による紙の粗悪さもあって、良好な状態で現存するものは少ない。また、上演台本などは藁半紙にガリ版印刷というのが20~30年前までは当たり前だったため、時代状況に関わらずその状態は良くない。そしてこうした上演資料を体系的に収集・保存する機関は日本国内では少なく、資料の公開・研究利用といった部分では更に遅れがある。

「近代演劇上演記録データベース」は、早稲田大学演劇博物館が昭和3(1928)年の開館以来収集・保存に努めてきた上演資料の内、紙資料からの情報を基に作成し、公開することを目的としている。対象となる期間は、大正元年~終戦(1912~1945年)、その情報項目は“上演場所・年月日・演目・作者・演出家”など全35項目(「ふりがな」を含む)から成り、このデータベースだけで一つの上演年表としても機能する。しかもこれらの情報は全て演劇博物館所蔵の一次資料から作成されているため出典が明らかであり、配役など更なる詳細を調査することも可能だ。また、現在の歴史的評価とは関係なく、資料の有無によって作成されるため、ここから未知の劇団や上演が発見されたり、再評価の契機をつくることもあるかもしれない。既に演劇博物館web上で公開している「現代演劇上演データベース」(1946~現在)と共に、本データベースが提供する一次資料情報を今後の日本近現代演劇の研究に役立ててもらいたい。

(演劇博物館助手・特別研究生 中野正昭)

演劇理論研究(西洋／比較)コース 活 動 報 告

2005年ノーベル文学賞受賞作家ハロルド・ピンターをめぐる
『灰から灰へ』リーディングとトーク

2006年3月10日(金)14:00～16:30 文学部演劇映像実習室

コーディネーター:谷岡健彦(東京工業大学)

出演:瀬戸口郁(文学座) 石井麗子(文学座) 神野崇(文学座)



ハロルド・ピンターの演劇作品は、主に1960年代に英国のみならずヨーロッパ各地の演劇活動に影響を及ぼし、彼の作風は一種の流行を巻き起こした。20世紀の西洋演劇を研究する者にとって、ピンター作品をしっかりと把握しておくことは重要であるのみならず、一般社会に与えた影響も計り知れない。すでに作家活動から遠のいて久しいピンターだが、2005年のノーベル文学賞授与は改めて彼の持つ影響力の射程を再認識する機会となった。すでに多くの上演がなされ、研究も盛んなピンターだが、彼の作風に大きな変化があることはあまり注目されていない。英国においても日本においても1980年代以降の作品はなかなか上演される機会に恵まれない。今回の公開リーディングは、その穴を埋めるべく企画されたものである。

今回は現代英国演劇作品の翻訳をこれまで多く発表してきた東京工業大学助教授の谷岡健彦氏をコーディネーターとして生れた企画である。文学座に所属する瀬戸口郁氏、石井麗子氏、神野崇氏という3名の役者が朗読を試みた。約一週間の綿密なリハーサルを経て臨んだリーディングには予想以上の観客がつめかけ、会場ははち切れんばかりの満員となった。役者たちの言葉はピンターの研ぎ澄まされた言語表現を体現し、その張り詰めた空気では微かな息遣いまでも聞こえるほどであった。

休憩の後、谷岡氏が戦後英国演劇の概略を示し、ピンター作品の歴史的位置づけを試みた。谷岡氏の解説は非常に示唆に富んだものであり、観客を活発な議論へといざなった。また特異なピンターの世界を経験した3人の役者たちがリハーサルの苦労を述べた言葉には説得力があり、観客の感心を一層深いものにしていた。

いまだ日の目を見ることが少ないピンターの80年代の作品だが、このような朗読とトークを一体として提供する機会が彼への関心を一新し、その作品の上演と研究を促すことになればと願うばかりである。

(客員研究助手 川島健)

演劇理論研究(東洋)コース 活 動 報 告

春柳社は、二十世紀初頭に東京で芝居好きの中国人留学生が創立した芸術団体である。春柳社が1907年6月に上演した『黒奴籠天録』(コクドユテンロク)は大成功を収め、東京の新聞雑誌にも劇評が次々と掲載された。公演の反響は中国にも伝わり、京劇など中国伝統演劇とは異なる新しい演劇、文明戯が生まれる端緒となった。文明戯は、さらに中国の現代演劇である話劇を産み出す母体ともなった。今日では、春柳社『黒奴籠天録』公演は中国話劇の嚆矢とみなされている。

演劇理論研究(東洋)コースでは、2007年が春柳社百年にあたることから、春柳社、文明戯研究をより深めるために中国の研究者7名を招いて07年2月3、4日に国際シンポジウムを開催する。

国際シンポジウムは形式に流れることが多いが、このシンポジウムではそれを避けるため05年夏より準備のための文明戯研究会を開催してきた。研究会後は日・中文で会報を発行し、研究成果の共有と研究者間の交流に努めた。

このシンポジウムではこれまで春柳社研究に従事してきた研究者のほかに、二十世紀初頭の日本演劇界に詳しい日本演劇研究者も招き、研究の立体化をめざす。春柳社は同時期の文芸協会とも深いつながりがあり、早大演劇博物館が春柳社100年シンポジウムを開催することは特別の意義があるだろう。



春柳社『黒奴籠天録』舞台写真(『演芸画報』明治40年7号掲載)

(客員講師・摂南大学教授 瀬戸宏)

Event Calendar

◆古典演劇研究(人形浄瑠璃文楽)コース

COE公開講座「浄瑠璃」

開催日: 9月25日(月) 14:00~

場所: 早稲田大学小野記念講堂

内容: 「往古曾根崎村唄」教興寺村の段(竹本千歳大夫・野澤錦糸)

COE公開講座「浄瑠璃」

開催日: 10月10日(火) 14:00~

場所: 早稲田大学小野記念講堂

内容: 「北条時頼記」女鉢の木雪の段(豊竹英大夫・鶴澤清友)

◆演劇理論研究(西洋/比較)コース

国際サミュエル・ベケットシンポジウム 東京2006 “Borderless Beckett”

後援: 独立行政法人日本学術振興会、アイルランド大使館、フランス大使館

開催日: 2006年9月29日(金)~10月1日(日)

場所: 早稲田大学国際会議場

特別講演 9月30日(土) 16:00~17:00

J.M.クッツェー(2003年ノーベル文学賞受賞)

特別講演 9月30日(土) 17:00~18:00

テレンス・ブラウン(ダブリン大学)

基調講演

9月29日(金) 10:30~11:40

メアリ・プライデン(カーティフ大学)

9月29日(金) 16:00~17:10

スタンリー・ゴントラスキー(フロリダ州立大学)

9月30日(土) 10:30~11:40

エヴリン・グロスマン(パリ第7大学)

10月1日(日) 16:00~17:10

スティーヴン・コナー(ロンドン大学)

特別パネル1「ベケットとその世紀の芸術」

9月30日(土) 14:30~15:40

イノック・ブレイター(ミシガン大学、サミュエル・ベケット協会会長)

アンジェラ・ムアジャーニ(メリーランド大学、名誉教授)

リンダ・ベン・ツヴィ(テル・アヴィヴ大学)

特別パネル2「クレマンと若手研究者の対話」

10月1日(日) 14:30~15:40

ブリュノ・クレマン(パリ第8大学)

特別公演

○「ベケット頌:『クワッド』によって触発された能役者によるエチュード」

日時: 10月1日(日) 18:00~18:40

場所: 早稲田大学国際会議場井深大ホール

出演: 清水寛二/西村高夫/柴田稔/谷本健吾(観世流シテ方・鏡仙会)

打楽器: 橋政愛

演出: 笠井賢一

日程などに関しましては、詳細が決まり次第下記ホームページにて告知していきます。

<http://beckettjapan.org/borderless-j.htm>

◆演劇理論研究(西洋/比較)コース

日豪交流年・早稲田—Dramatic Australia プログラム

共催: 日豪交流年2006公式事業「ドラマチック・オーストラリア」

協力: オーストラリア外務貿易省、オーストラリア大使館

・「世界をリードする演劇学校—NIDA」

講演者: オープリー・メラー(豪国立演劇学校【NIDA】校長)

開催日: 2006年9月26日(火) 18:30~

場所: 早稲田大学小野記念講堂(通訳あり)

・シンポジウム「文化を越える演劇」

パネリスト: ウェスリー・イノック(演出家/劇作家)、コディ・ポール

ルトン(ヴィクトリア大学)、ピーター・エッカサル(メルボルン大

学)、和田喜夫(演出家)、吉原豊司(翻訳家)(予定)

開催日: 11月上旬『クッキーズ・テーブル』公演期間中の予定

場所: 早稲田大学6号館318教室(レクチャールーム)

日程、「ドラマチック・オーストラリア」プログラムの全体については下記へ。

<http://dramaticaustralia.crane-design.com/>

◆演劇研究センター

イブセン没後100年記念フェスティバル

開催日: 2006年11月9日(木)~11日(土)

場所: 早稲田大学小野記念講堂

(開催期間中にワセダギャラリーで関連展示あり)

主催: 早稲田大学21世紀COE・演劇研究センター、ノルウェー

王国大使館、日本演劇協会、国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本セ

ンター、早稲田大学演劇博物館

11月9日(木) 13:00~17:00

13:00~ 開会挨拶

13:30~ 講演: 河竹登志夫(早稲田大学名誉教授)「日本におけるイブセンの受容—黎明期を中心に」

15:00~ 一人芝居: 『イブセンの女たち』出演: ユーニ・ダール(ノルウェー)

(英語上演、日本語解説書あり/上演時間約1時間)

*終演後ポストトーク有り

11月10日(金) 13:00~16:30

13:00~ 解説: 小松弘(早稲田大学教授)

13:30~ 映画上映: 『波高き日』(1917年 無声映画、原題『Terje Vigen タリエ・ヴィーゲン』)

15:00~ 映画上映: 『人民の敵』(2005年 英語字幕)

11月11日(土) 13:00~17:00

13:00~ 講演: エロール・デュルバック(カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授)

15:00~ シンポジウム: 『我々にとってのイブセン』

パネリスト: エロール・デュルバック、安西徹雄(上智大学名誉教授)、毛利三彌(成城大学教授)ほか

*以上のイベントの開催場所に関しては、右記のホームページをご参照ください。 <http://www.waseda.jp/jp/campus/index.html>

演劇研究センターメールニュース配信のお知らせ

演劇研究センター主催の公開研究会やシンポジウムなどの情報をメールニュースでお届けします。

(1) 配信は不定期です。

(2) 個人情報はメールニュースの発信および演劇研究センターからのお知らせ以外には使用いたしません。

(3) ご不要の場合にはいつでも配信を止めることができます。

(4) 携帯電話のメールアドレスには配信いたしません。

登録は右記のホームページからお願いします。 <http://www.waseda.jp/prj-2lcoe-enpaku/index.html>



『歌舞伎登場人物事典』

(河竹登志夫監修・古井戸秀夫編 白水社 2006年4月発行)

古典演劇研究(歌舞伎・日本舞踊)コースで行ってきたテキスト分析研究の成果として、『歌舞伎登場人物事典』が白水社から出版されました。登場人物に焦点を当てた研究的な事典はこれまでにはありませんでした。

歌舞伎に登場する人物約2300人を取り上げ、人物の行動、先行作品やモデル(史実、伝説)や現行の演出などを、図版を多数掲載しながらまとめています。重要な人物はもちろんのこと、気になる端役まで取り上げています。

付録は衣裳と髪をイラスト入りで解説した「歌舞伎の扮装」と、現代の歌舞伎を知る上で参考となる書籍を紹介した「芸談・型の記録・写真集一覧」。巻末には登場人物

索引、作品別索引、作品所収一覧があります。二種類の索引があることで、歴史上のモデルや、作品から人物を関連づけて引くことが可能となりました。作品所収一覧には戯曲の主な翻刻、参考文献が記載されています。(特別研究生 近藤美織)

『コレクション・モダン都市文化19 映画館』

(十重田裕一編著 ゆまに書房 2006年5月発行)

本書は、日本のモダン都市文化を総合的・横断的にとらえようとする叢書の一冊として刊行された。国際映画通信社編『昭和五年版 日本映画事業総覧』など1920～30年代日本の映画館関係資料と、これをめぐるエッセイ・解題・関連年表・主要参考文献によって構成されている。志村三代子氏(映像アーカイブコース客員研究助手/日本映画専攻)と石月麻由子氏(日本近代文学・文化専攻)の多大なご協力のもと、映画常設館に関する資料を収集し、限られた紙幅のなかで編集を行い、容易にはその概念と領域を規定しえない映画館の多様な一面を提示しようと試みた。(研究協力者 十重田裕一)



2006年度特別研究生 秋期募集

概要:

21世紀COE特別研究生は、21世紀COEプログラムに参加し、研究に従事することができます。研究遂行上必要な図書館等学内施設の利用について便宜を図るほか、災害傷害保険の加入等を行います。給与・研究費等は支給されません。

募集期間:

2006年7月1日(土)～8月1日(火)締切

応募資格:

- (1) 本大学の博士後期課程に在学する者または課程修了者
- (2) 他の大学院または研究所等(外国の研究機関を含む)から派遣された博士後期課程在学者または課程修了者
- (3) 前2号に準ずる学歴または学識を有する者として、大学が特に認める者

採用期間:

2006年9月1日～2007年3月31日(年度内の採用となります)

詳細は下記のホームページをご覧ください。応募書類の書式もこのホームページからダウンロードできます。

<http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/jp/student/index.html>

編集後記

暑中お見舞い申し上げます。

COEの事務局が6号館の4階に移ってまもなく3ヶ月。1930年代半ばに理工学部実験室として建てられた6号館はどの部屋も天井が高く開放感があり、事務局の居室の大きな窓の向こうには演劇博物館本館の後ろ姿が間近によく見えます。

事務局の移転とともに同室に移動した私ですが、引切り無しに鳴る電話や訪れるお客・関係者、数々の打ち合わせなど、なくてはならない縁の下の力持ちの存在を改めて感じた3ヶ月でした。COEの活動は先生方のリーダーシップのもと、事務局や演劇博物館本体の多くのスタッフとともに進められています。博物館を裏側からぐいっと掴むように眺められるこの部屋は、まさに事務局にふさわしい部屋である、というのは少々言いすぎでしょうか。(6号館にエレベーターがあるのもっとよいのですが)

さて、イギリスからの近松演劇で幕を開けた今年度のCOEは、モンゴル演劇・映画をはじめ各種講座・セミナー・シンポジウムなどまだまだ全力で走り続けています。秋以降も、ベケットやイブセンに関連した大型事業のほか、様々な活動が予定されています。

どうぞ充実した夏休みをお過ごし下さい。

(と)

News Letter 第4号

2006年7月20日

編集: 江口文恵 川島京子 川島健 木村理子 志村三代子 宮崎刀史紀

発行者: 早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館・演劇研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-8110

URL: <http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/>

事務局移転のお知らせ

COE事務局は5月より6号館4階413室に移転いたしました。これに伴い、電話番号・FAX番号が変更になっております。(内線番号・住所に変更はありません)

TEL: 03-5286-8110

FAX: 03-5286-8119